

町田市教育委員会 御中

2020.12.15

## 町田市鶴川地区町内会自治会連合会

教育委員会の2040年度小中学校の適正通学区域案には現実の地域の情勢を考えると不適正な点が存在すると思います。鶴川地区町内会自治会連合会では教育の体制をかんがみて次のような計画案を提案したいと思います。

A案とB案を提案する。A案が一番現実的な案である。鶴連としてはこの案を推奨する。B案は鶴川中学校を実験校として町田市の教育の目玉とする構想である。そもそも鶴川中学校を移転改築する計画の時に当時の寺田市長と山田教育長のあいだで千葉県で作られた教科教室型の学校がモデル校として紹介された。私の意見としてはこれに寺田市長が飛びついて実施することとなった。現場の鶴川中学校において十分な検討がなされたとは聞いていない。鶴川中学校のPTAとしては大いに賛成したことはおぼえている。ちなみに当時私は町田市中学校PTA連合会の役員で真光寺中学校の保護者と教職員の会（PTA）の会長でした。現在残念ながら教科教室型中学校として成果を上げているかは評価のむずかしいところである。もし教科教室型の学校としてのモデル校として存在させようと思ったらB案のような思い切った計画が必要だと考える。

A案の場合は鶴川第3小学校を鶴川第4小学校の統合した場合にその跡地を鶴川第2中学校の敷地として使用する。そうすることで200mトラック、野球、サッカーなどの広い面積を必要とするクラブ活動を積極的に行うことができる。750人規模の中学校となれば現状の体育館を2棟維持しても体操、バスケットボール、バレーボールなどの運動もできる。教育委員会案による真光寺中学校を残すというプランよりも鶴川第2中学校を充実させるほうがメリットが大きいと思います。

## I 教育委員会が提示した案には賛成できない

教育委員会が提示した「町田市立学校の新たな通学区域案(2040年度)」には賛成できない。最大の理由は、真光寺中学校が推計生徒数201人だからである。

### 1、全校生徒201人の小規模校には、授業形態面で大きなデメリットがある

鶴川二中学生の時間割表を見ると、「国Ⅰ」「国Ⅱ」「数Ⅰ」「数Ⅱ」「理Ⅰ」「理Ⅱ」「社Ⅰ」「社Ⅱ」「英Ⅰ」「英Ⅱ」…と書かれている。国、数、理、社、英の主要5教科授業はⅠとⅡに分けられている。数Ⅰは数量分野、数Ⅱは図形分野。理Ⅰは生物・地学分野、理Ⅱは物理・化学分野。社Ⅰは地理分野、社Ⅱは歴史分野なのである。

Ⅰの授業をする教員とⅡの授業をする教員は別人である。主要5教科をⅠとⅡに分け、別教員が授業を担当するためには、各教科に2名以上の教員がいなければならない。

下の表を見ていただきたい。学年3学級以上だと、主要5教科の教員は2名以上である。ところが学年2学級の学校になると、主要教科でも1名である。学年3学級以上の学校と大きな違いが生じるのである。

| 学年の学級数 | 全学級数 | 教員数 | 教科別の配置教員数                   |
|--------|------|-----|-----------------------------|
| 2      | 6    | 10  | 国1、数1、理1、社1、英2、体1、音1、美1、技家1 |
| 3      | 9    | 14  | 国2、数2、理2、社2、英2、体1、音1、美1、技家1 |
| 4      | 12   | 18  | 国3、数2、理3、社2、英3、体2、音1、美1、技家1 |
| 5      | 15   | 22  | 国3、数3、理3、社3、英3、体3、音1、美1、技家2 |
| 6      | 18   | 27  | 国4、数4、理4、社4、英4、体3、音1、美1、技家2 |
| 7      | 21   | 33  | 国5、数5、理5、社4、英5、体4、音2、美2、技家2 |

2040年の真光寺中の全校生徒は推計で201人、1学年あたりにすると67人。1学年2学級である。真光寺中は「主要教科は2分野に分け、別の教員が受け持つ」という体制をとれない。学年2学級校の経験がある理科教員が述べた。「理科は実験の準備などがあるので他教科以上に授業の準備に時間がかかる。学年2学級校では、部活の指導などしていったら日々の授業に支障をきたす」と。

「町田市立学校の適正規模・適正配置の基本的な考え方」(「基本的な考え方」)で、市教委は「未来の子どもの立場に立って、ソフト・ハードの両面からより良い教育環境をつくる」と述べている。私たちは、「確かな学力を身に付ける」ためには、学年2学級校は「良い教育環境」と言えないと考える。

学年2学級の中学校は、学年3学級以上の中学校に比べ大きなデメリットがある。

### 2、学年2学級校を保護者は容認しない。

鶴川地区の他中学校の規模を見てみると、鶴川中は307人(学年102人3学級)、鶴二中は540人(学年180人・5学級)、金井中と薬師中統合校は449人(学年150人・4学級)である。学年2学級は真光寺中だけである。

中学生には高校受験が控えている。受験教科は主要5教科である。その主要5教科の授業体制が周りの中学校と大きく違う。「他中学よりも学力で劣ることにつながる」「受験に不利だ」と保護者は思う。学年2学級が確実な統廃合案を保護者は絶対に容認しないと考える。

というわけで、私たち鶴川地区町内会・自治会連合会は、市教委案に対しての代案を提出することにした。

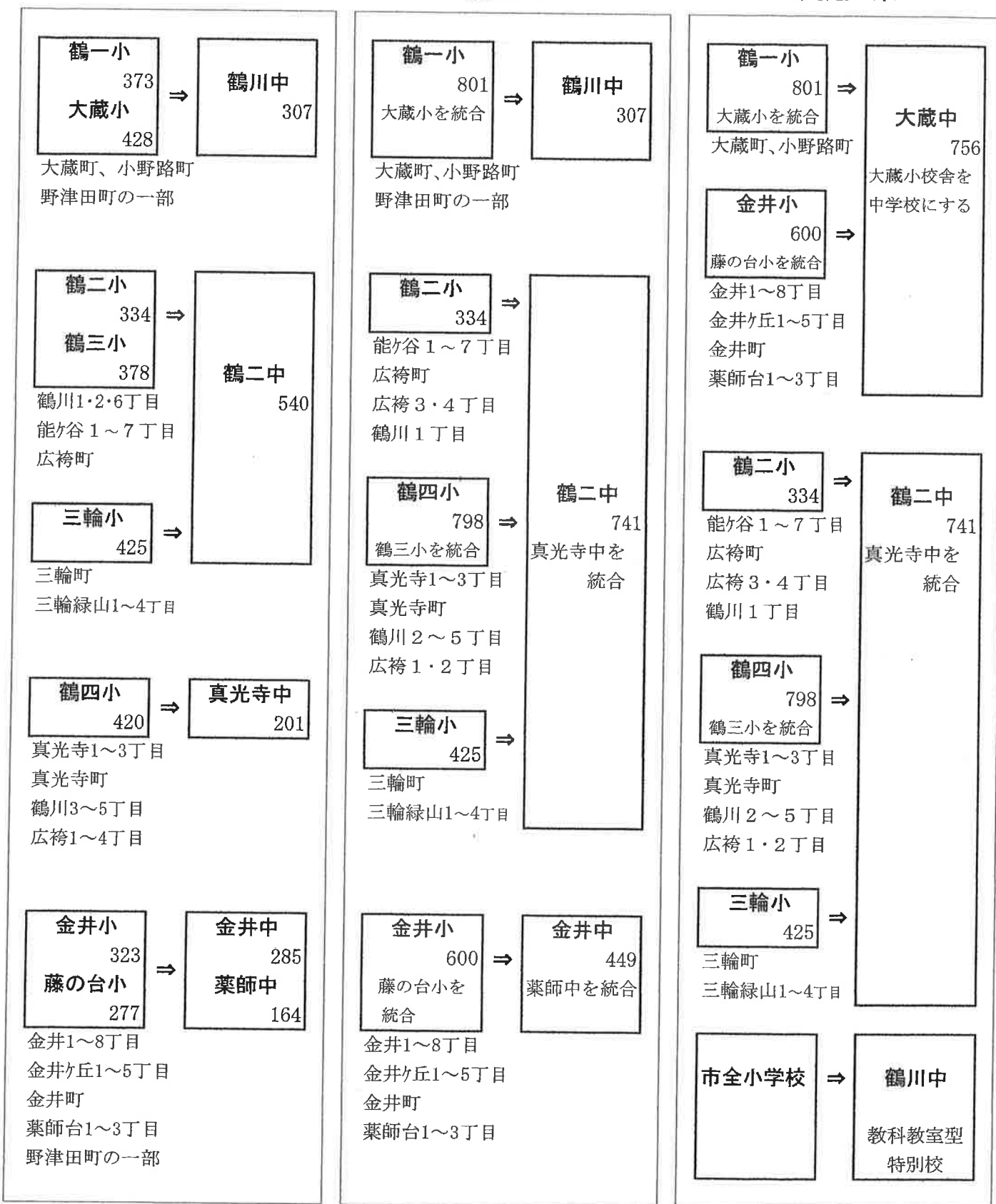
II 鶴連案

次のA案、B案を提案する。教育委員会案と比べやすいように、3案を並べて図にしてみた。  
 A案、B案と2案あるのは、教科教室型校舎の将来について、教育委員会がどのように考えているのかが分からなかったからである。A案は、教科教室型を他校と同等に扱う案、B案は教科教室型の理想を追い続ける案である。

教育委員会提示案

鶴連A案

鶴連B案



※校名の下に数字は、その学校の2040年推計児童・生徒数

### Ⅲ 鶴連A案のポイント

鶴連A案は、教育委員会案に則り、鶴連として賛成できない部分を修正した案である。

#### 1、真光寺中を鶴二中と統合させる

真光寺中は「1学年あたりの望ましい学級数」を大幅に下回る学校になる。統合して、真光寺中学区域の生徒にも適正規模校での教育を保障すべきである。

##### (1)真光寺中と鶴二中が統合しても許容できる生徒数である

真光寺中が統合するとなると、統合相手は鶴二中である。鶴川中との統合は、安全な通学路がないので難しい。真光寺地区生徒の通学を考えると統合相手は鶴二中しかない。

統合した場合の校舎は、三輪地区からの通学を考えると当然鶴二中になる。生徒数は、推計で741人。学年あたり240人。1学年6学級か7学級で、「1学年あたりの望ましい学級数」をわずかに超える程度である。現在の鶴二中の生徒数751人よりも少ない。学年7学級校のデメリットは学年2学級のデメリットより小さいと考える。

##### (2)鶴二中を「ゆとりある学校施設環境」にすることができる

「町田市立学校の適正規模・適正配置の基本的な考え方」に望ましい学級数を上回る学校が生じる場合には、「ゆとりある学校施設環境」の整備を検討するとある。

鶴二中と地続きの鶴三小は統廃合で空き校舎になる可能性が高い。そうすると、鶴二中が鶴三小の運動場、体育館、特別教室等を使える。「ゆとりある学校施設環境」にできるのである。鶴二中を「ゆとりある学校施設環境」の学校にしておけば、仮に鶴川団地が建て替えられて生徒数が増えても対応できる。

##### (3)通学には路線バスを使える

真光寺公園わきのマンション（レバンスカルテソ）から鶴二中まで、直線で2.2km、道なりで2.6kmである。真光寺公園～鶴川駅バスで平和台入口下車、または若葉台駅～鶴川駅バスで消防署前下車で30分以内で通学可能である。

#### 2、鶴三小と鶴四小を統合する

##### (1)鶴二小と鶴三小の統合より、鶴三小と鶴四小の統合がよい

①鶴三小は鶴川団地建設で、鶴川団地地区のために建設された小学校である。

鶴川団地の子どもはすべて鶴三小であった。収容しきれなくなったので鶴四小が建設された。鶴川団地の子どもを同じ小学校に通学させるのが妥当である。

②青少年健全育成地区委員会も「鶴三小と鶴四小」「鶴二小と三輪小」の組み分けになっている。

③鶴二小が統合する相手校は三輪小が適当である。

1964年～1981年まで、三輪小は鶴二小学区区域だった。将来的に鶴二小が単学級になるようなことになった場合、統合相手は三輪小が適当であると考えられる。

##### (2)統合後の校舎は鶴四小校舎がよい

真光寺地区からの通学を考えると鶴四小にするのが適当である。旧鶴三小学区はどこからでも徒歩20分以内で通学できるので、通学距離・時間とも問題ない。

## IV 鶴連B案のポイント

B案は、教科教室型中学校を「望ましい学級数」で維持し続ける案である。

### 1、現鶴川中学校を、市内全域から入学できる唯一の学校にする

#### (1)教科教室型教育校が小規模校になってよいか

鶴川中学校の校舎は教科教室型校舎として建設されたものである。教科教室型教育を支えるのは教科ごとの「教師チーム」の力である。チームとして力を発揮するためには、最低3名必要と考える。鶴川中学校は15学級を想定して建設された。15学級だと、9教科中6教科で教員3名以上となる。

2040年の鶴川中の推計生徒数は307人。1学年100人ほどで3学級、全校で9学級である。9学級だと主要教科の教師は2名となる。2名ではチームとしての力を発揮するのは難しい。教科教室型教育の成果をあげ続けていくためには15学級が必要である。

#### (2)鶴川中学校と他中学校を統合するのは難しい

他校を鶴川中に統合させれば15学級にすることができる。しかし、鶴川中はその地理的位置の関係から、他校を統合することは極めて難しい。

#### (3)鶴川中学校を、市内全域から入学可能な唯一の学校にする

小野路や野津田の生徒が通うのは大蔵中学校とする。鶴川中は市内唯一の通学区域をもたない学校にする。通学区域緩和制度の廃止を前提にしているのも、市内唯一である。教員も、教科教室型教育推進に意欲のある教員を集める。進学指導重点都立高校の中学校版にしようという考えである。

### 2、すべての中学校を複数小学校から進学してくる学校にすることが可能になる

「…複数の小学校から一つの中学校に進学する場合、新たな友人関係をつくったり、新たな考え方に触れたりすることができる良さがある…」これは「町田市立学校適正規模・適正配置等審議会」の答申に述べられていることである。鶴連も全く同感である。

教育委員会案では、2校以上の小学校から進学は鶴二中だけで、他の3校は1小学校→1中学校である。鶴川中を通学区域を指定しない市内唯一の学校にすると、鶴川地区の中学校すべてを「複数小学校から進学してくる中学校」にすることが可能となる。

#### (1)鶴川中、金井中、薬師中の3校を統合しても、現鶴川二中規模である

事務局が出した推計生徒数は、鶴川中307、金井中285、薬師中164で、いずれも1学年3学級以下である。この3校を1校に統合すると全校756人・学年252人で、現鶴川二中と同規模の学校である。

#### (2)大蔵小を「鶴川中、金井中、薬師中の統合校」にすればよい

大蔵小は鶴川地区の中央部にある。小野路地区、野津田地区の生徒もバス停が2つ程遠くなるが通学可能である。金井地区も通学距離やバスの便を考えると通学可能である。

小学校校舎を中学校に転用することは、昭和41年に鶴一小が野津田へ移転した後、その空き校舎に鶴川中が移転したことがある。小学校校舎を中学校校舎にすることは可能だと考える。

また大蔵小は24学級を想定して建設された学校なので、1学年6学級・全校で18学級の中学校にすることも可能である。

## V 付帯意見

### 1、通学区域緩和制度は即刻廃止すべきである

(1)通学区域緩和制度は、実質的に学校選択制度である。学校選択制度は人気校と不人気校を生み出す。不人気校は存続が難しくなり人気校に統合される。適正配置に関係なく統廃合が起こってしまう。学校選択制を取り入れた品川区の学校統廃合がそうであった。

(2)通学区域緩和制度をこれ以上続けていくと、市民は「保護者はどこの学校に入学するかを決める権利をもっている。教育委員会に指定されることではない」という考えになる。教育委員会が統配合案を提示することに同意しないであろう。

### 2、適正規模の基準は学級数だけではない、児童数・生徒数を加味すべきである

25人学級になったら、1学年51人だと3学級なので適正である。1学年101人は5学級で不適正である。“1年生になったら友達100人できる学校”は不適正で、“友達50人できる学校”が適正となる。これでよいだろうか？

大人数にも良さがある。有名私立中学校長が述べた。「我が校は1学年300人。300の個性が刺激し合い、切磋琢磨し合う。我が校が有能な人材を輩出し続けられる秘訣です」と。1学年300人の中学校が最適正という意見もあるのである。

町田市教育目標の“未来を切り拓く町田っ子を育てる”ためには、1学年の人数ほどのくらいが適切なのか、学級数だけでなく児童数・生徒数の目安も出してほしい。

### 3、バス通学を増やさないと、小規模校だらけになってしまう

#### (1)「基本的考え方」にある“徒歩で2km”にこだわるべきではない

教育委員会案をみると、「1学年あたりの望ましい学級数」を確実に下回る学校が、小学校は35%、中学校が31%である。下回るかもしれないという学校を含めると、小が54%、中が50%である。徒歩2kmにとらわれて学校数を減らせないのだと思う。

町田市のような面積が広い自治体では、バス通学は当たり前という考え方にならなければ、統廃合を進めるのは難しい。

西多摩郡檜原村は、小学校8校を1校に統合した。徒歩通学から路線バス通学にしたのである。最も遠い数馬地区の子は、小学校まで13kmをバスで通学している。バス通学を標準にすれば、檜原村のような思い切った統廃合もできるのである。

#### (2)子どもの通学に合わせたバス路線をつくれるとよい

バス利用で考えられるのがスクールバスだが、先の檜原村はすべて路線バスを利用している。バス会社も子どもの通学にあわせた時刻表にしている。

路線バスで参考になるのが、和光学園である。鶴川駅発一和光学園行きという路線バスが朝夕の通学時間帯だけ走っている。もちろん一般人も乗車可である。

鶴川地区なら、神奈川中央交通と協力すれば、子どもの通学に合ったバスを走らせることも可能ではないかと考える。

例えば、「若葉台駅－真光寺公園－平和台入口－藤の木－三輪－三輪緑山－こどもの国駅」という路線バスを走らせれば、真光寺・広袴・能ヶ谷を鶴川二小の学区域にすることもできる。また、三輪地区から鶴川二中への通学も容易になる。

#### 4、特別支援学級の適正配置も考えてほしい

教育委員会の案で統廃合が行われると、知的支援学級は、鶴二小、鶴四小、金井小+藤の台小に、情緒障害学級は鶴四小に置かれることになる。知的・情緒を合わせて4学級のうち2学級が鶴四小である。それでよいのか。小野路地区や野津田地区は近くに特別支援学級がないので、通学は一苦勞である。学校統廃合に合わせて、特別支援学級の適正配置も検討していただきたい。

#### 5、教員育成の視点からも「適正規模」を考えてほしい

教育委員会は“ソフト・ハードの両面からより良い教育環境をつくる”視点から学校統廃合を審議したという。

小学生の親たちから、「うちの学校は若い先生ばかりだ。こういう教師集団で大丈夫なのか」という不安の声を多く聞く。鶴連は、「良い先生」がそろっていることが、最高の「良い教育環境」だと考える。

ある教員退職者から「新規教員の時に大規模校で教員が多かったので、あらゆる分野のスペシャリストがいた。そういう先輩に教えていただいてすごく勉強になった」との話を聞いた。大規模校のメリットである。教員の年齢構成が若返っている今、若手教員の育成は極めて重要である。教員育成の視点からも適正規模を考えてほしい。

#### 6、学童クラブは減らさないでほしい

子育て世代が転居先を考えると、小学校が近い、学童クラブがお迎えに便利な場所にあることを重視する。だから、学校が統廃合になっても学童クラブ数は減らさないでほしい。保護者のお迎えを考えたら、鶴川駅近くのビルに学童クラブがあると有難い。

町田市の小学校はみな駅から遠いので、学童クラブの送迎を自動車で行っている人が多い。思い切って、学校敷地内に学童クラブ送迎用の駐車場を設置することを考えてほしい。駐車場スペースのない学校は、学校近くの民間駐車場を借りるようにしたらよい。

子育て世代のニーズに応える施策を実施し、子育て世代を呼び寄せることに力を注いでほしい。

#### 7、廃校になる学校の跡地利用計画を示すと、統廃合への賛成が得やすいであろう

鶴川地区の小中学校のうち、教育委員会案では4校、鶴連案では6校が廃校となる。廃校後その跡地がどのように活用されるのか、それによって統合賛成・反対が左右される。

特に鶴川三小は鶴川団地の中央、鶴川地区全体の中央部、鶴川市民センター近くにあるので、非常に重要である。魅力ある活用案が提示されると統廃合への賛成が増えると思う。

#### 8、学区の線引きにあたっては、町内会・自治会と協議していただきたい

「すべての地域を一番近い学校の学区にすることは不可能である。遠い学校の学区になっても、通学に無理ない距離・時間の範囲内ならば、それは受容すべき」と鶴連は考える。

しかし、A校の学区がよいかB校の学区の方がよいかは、学校までの通学距離・時間だけでなく、様々な事情がからんでくる。したがって、学区の線引きにあたっては、町内会・自治会の意向を聞いて調整を図っていただきたいと願う。